資　料

看護の基礎を築いたF.ナイチンゲールの故郷である英国ロンドンの医療サービスについて知る

A Report on the Medical Services in London-Home to Florence Nightingale, who Laid the Foundation for Nursing

東野友子[1)]　中川初恵[1)]　泉澤真紀[1)]　澤田みどり[1)]　山内亮史[2)]

Tomoko HIGASHINO, Hatsue NAKAGAWA, Maki IZUMISAWA,
Midori SAWADA and Ryoji YAMAUCHI

[1)] 旭川大学保健福祉学部保健看護学科，[2)] 旭川大学・短期大学部

キーワード：NHS，ナイチンゲール，英国ロンドン

は　じ　め　に

看護の歴史は修道院の中で修道女が行っていたことから始まる。基礎教育があるわけではなく慈善事業の一つとされてきた。しかし，そこにクリミア戦争で負傷した兵士を献身的に看護した「クリミアの天使」と称された，F.Nightingale の存在があった。彼女は自身の経験をもとに「看護覚え書」を著作し，今日の看護基礎教育を発展させる基になった偉大な人である。また，この著作本は私たち看護を行うものにとっていわゆるバイブル的な書物であり，時代は変わっても看護する心は変わらない基本となるものである。

そこで，現代看護の基礎を築き世界初の看護学校を設立した F.Nightingale の祖国，英国ロンドンを訪ね，英国における医療や看護，保険サービス等に関する話を聞き，施設を見学することとした。ここに見聞きしてきたことについて報告する。

見　学　内　容

英国ロンドンへ行き，ロンドン大学病院：University College Hospital in London（以下 UCLH）のがんセンターでのスペシャリストナースからの説明や施設見学，ナイチンゲール博物館での説明，National Health Service（以下 NHS），Community Care 、Mental Care の職員から説明を聞き学習した。

1．見学・講習内容

1）UCLH の Macmillan Cancer Support Center

UCLH のマクミランがんセンターはがん患者とその家族を支える慈善団体であり，この施設の創設者でもある Douglas Macmillan が家族のがん闘病を経験したことから，がんに苦しむ人々のサポートとして1911年に開設された。また，この施設は 145 億円の資金で設立されたが，現在ではマクミランモーニングコーヒーなどのチャリティーで資金を集めている。建物は窓が大きく明るい様子であった。廃材でできたオブジェがホールの天井につるされ，壁には患者，家族が描いた絵も飾られていた。広いフロアで仕切りがなく見通しの良い造りであった。事務局で働く職員は看護師であり，がん看護のスペシャリストである。オープンスタイルの事務局は，リビングルームと称され，そこで患者や家族が情報担当者と面談し，必要に応じて医師，看護師，薬剤師，リハビリ，精神療法士などのサポートを受けていた。脱毛や乳房切除によるボディイメージの変化に対応するウイッグやバストケアなどの職人等の紹介もしている。患者の状態は初期段階から終末期まで幅広く，亡くなった後の家族に対するグリーフケアも時間の許す限り対応している。個別性に対応し個々に合わせたサポートを提供しており，決まった枠はない。近年では Net 社会となり様々な情報が錯綜するため，不安になる患者も多い。患者自ら選択して直接アクセスしてくる。利用者が納得するまでゆっくり関わるため勤務時間が長時間に及ぶこともあるとい

う。しかし，必要とされる時に対応したいと思っており，それはやりがいにもなっていると話していた。

大学病院の中にあるがんセンターであったが，患者・家族に対するサポートを全面的に行うようなセンターが日本には見当たらない。日本では，がんセンターはあっても治療が最優先であり，「がんサバイバーに対してDVDやパンフレット等を用いて情報提供をすることが殆ど」[1]で，外来看護師も日々の業務に追われゆっくりと患者や家族の話を聞くまでに至らない。そのことから考えても，ゆっくりと関わりしっかり対応しサポートするUCLHの関わりを見聞し，日本においてもサポートや対応を考える必要があるのではないかと考えた。

写真１　マクミランがんセンターでの様子

写真２　st.トーマス病院とロンドンバス

２）The Nightingale Museum in the St.Thomas Hospital

私たちが次に訪れたのはナイチンゲールゆかりのSt.トーマス病院である。この病院は，ヴィクトリア王朝時代に設立され，世界で初めて看護学校を併設したことでも有名である。この一角にあるナイチンゲール博物館に私たちは行った。ナイチンゲールの生涯をパネルや，実際のものを用いて展示されていた。看護を学ぶ上で欠かせないナイチンゲールだが，彼女は看護の道に進み一生涯をそこに費やす事に無縁な裕福な家の生まれ育ちであった。それが，兵士の慰安のために父親と共に訪れたことが看護の道に進むきっかけとなった。男性優位の時代にも関わらず，病舎の劣悪な環境に対し，兵士の死因が感染症にあるという事を統計学的な視点で示し，医師と対等であろうとした。それは，その後の彼女の著書『看護覚え書』に記される「看護とは新鮮な空気，陽光，暖かさ，清潔さ，静かさなどを適切に整え，これらを活かして用いること，また食事内容を適切に選択し適切に与えること」[2]としたことに繋がったのだ。ナイチンゲールは別名「ランプを持つ貴婦人」とも称された。これは，常に病人に気づかい目を向け少しの変化にも気づき対処した事にある。これも彼女の同著書にある「観察の重要性」[3]に繋がるともいえる。Nightingaleが傷を負った兵士の命を救うためにとった行動は，臆することなくEvidenceを明確にして相手に伝えるという事であり，まさしく近年の看護の専門性に繋がると考える。

写真３　st.トーマス病院内のナイチンゲール像

写真４　フローレンスと姉（ナイチンゲール博物館）

３）NHS, Mental Care and Community Care in London

私たちは英国の保険サービスであるNHSについて，

精神保健に関する事，訪問看護における状況について説明を受けた（写真５）。

写真５

（１）NHS

NHS は「いつでも万人に医療を，ゆりかごから墓場まで」の理念を基に 1948 年に設立された。諸外国からの移民も含めてすべての人が NHS に登録することが出来，国民が納めている税金の付加価値税 20％から運用し医療費は無料で受けられる。しかし，日本と同様に国民の高齢化と医療の高度化による医療費の高騰があり，さらに諸外国からの移民の問題も，財政を苦しめている要因の一つとなっている。NHS は議員の任期交代による政策転換の影響を受け，民間の保険も増えたことによる NHS 加入者の減少なども要因となっている。税金を上げるか医療の質を下げるか究極の選択を迫られていた。貧困世帯が増えることを考えると税金を上げることは難しく，医療サービスの部分を削減することに取り組んだ。例えば，ホームドクター（General Practitioner：GP）の対応時間を制限し，軽症の場合には薬局で薬剤師が対応するなど病院受診者の減少の対策が練られた。さらに，生活指導に関する教育を徹底する事も考えられた。NHS が設立される前の英国について森は「諸外国と同様にお金持ちの裕福な家庭だけが医療を受けられ健康を享受できる環境にあった。」[4] と述べている。英国の医療に対する『必要な時に，万人が医療へアクセスできる』の理念より今日のNHS設立に至ったが，経済的な問題として大きな課題を抱えている。日本でもまた同様の問題を抱えている。高齢者の増大と医療費の高騰であり，それに対し政府は「生活習慣病対策や長期入院の是正」[5]など５年計画で取り組んでいる。医療費問題はどこの国においても同じ問題を抱えていると考えた。

（２）Community Care

Community Care は日本でいう訪問看護のことを表す。英国では在宅療養の医療サービスを中心に行われている。病院での療養よりコストの安い在宅療養を選択する人が増え，24 時間ケアも含めた在宅ケアも増加している。入院費が１日￥60,000 ～ 150,000 に対し，在宅では１日あたり￥27,000 である。さらに，感染のリスクを考えると安全だ。その背景には 2011 年～ 2013 年の調査で 219 の問題点が挙がったことにある。それは，医療の質の低下とし，サービス，職員の専門性，病院の安全性などであった。そこで，専門職としての教育を見直すという事に着目された。元々英国での看護教育は「養成機関で職業に必要な能力を育成する」[6] であり，経年経験によって培われたものがある。しかし，2015 年からの看護基礎教育は，学内の学習と臨地での学習それぞれ 50％ずつで教育内容を統一し，大学卒業同等の学位が必要となった。それが，2015 年を境に医療におけるシステムも変化したことに繋がった。専門性を身に着けることが医療サービスの向上，安全性に繋がると考えているが，看護教育の高等化による学費の高騰，大学進学の困難さも相まって看護師不足が懸念されている。マンパワー不足の中 24 時間訪問看護を必要としていることから，家族の協力は必要不可欠である。

一方，日本では近年高齢社会が要因して医療費の高騰が問題視されている。そのため入院日数の短縮化を図り，在宅医療・看護へ移行している。しかし，日本は GP という考え方の定着が薄いと考えられる。そのため，保健師による生活習慣病対策としての生活指導が必要だと考える。

（３）Mental Care（精神療法士）

日本における自殺の問題から英国における状況を聞いてみた。英国における自殺の要因の多くは，うつ，貧困，社会からの離脱，離婚などであり日本とさほど変わらない要因と考えられた。年齢は 40 歳代が多く，男性が多いという。その理由は離婚などを機に考える人が多いが，そこには英国男性の自身の状況を公にしない，責任感が強いなどが要因と考えられた。また，英国は歴史的に古い家が多いため家にかかる費用が高く生活困難者が多くなっている。また，ナイフ，ドラッグ等が簡単に手に入りやすい環境やメディアなどの影響も大きな要因であると考えられた。しかし，2018 年の自殺者の人数は最も低い 6,213 人であった。これは，自殺の選択を留まるよう啓蒙してきた国の政

策による。自殺念慮のあるうつなどに悩む人たちに対しどうアプローチするかが問題である。メンタルケアチームで対策を考え，GP の関わり，プライマリーケア，メンタルケア等で対応することが必要と考えているという事であった。

お わ り に

今回，英国ロンドンに行き Nightingale の活躍した看護の場面に触れ，現在の看護の状況を見聞してきた。Nightingale が切り開いた看護という姿勢が今もなお受け継がれ，病める人々に寄り添い関わろうとする姿勢が読み取れた。日本においては大学教育が当たり前になってきているが，いつの時代も病める人々に対して寄り添い関わる気持ち，根拠をもって物事を考え行動化する事が大事であると考える。また，英国は数百年前あるいは数千年前の古い建物をそのまま残し，中を改装して人々が住んでいるなど，古いものを大事にする国であると考えた。温故知新という言葉があるように，看護においても時代が変わろうと変わらぬ基本姿勢がある。そこに新しい知識を持つことが必要と考える。

引 用 文 献

1）田　龍一，竹宮健司：がん診療連携拠点病院における情報・相談・交流支援体制とその空間的対応に関する考察，日本建築学会計画系論文集，70，706，2641-2650，2014.

2）　F.Nightingale，湯槙ます他訳：看護覚え書，東京，株式会社現代社，7，15，2017.

3）前掲書，178-226 要約引用

4）森　宏一郎：英国 NHS の歴史，医総研，リサーチエッセイ，45，1-9，2004.

5）医療費適正化計画の推進：厚生労働省ホームページ，http://go.jp/bunya/ shakaihosho /iryouseido01/taikoku04.html（2019/12/12 検索）

6）柴田恵子：イギリスにおける看護職の専門職化と大学教育－日本への示唆－，大学アドミニストレーション研究，6，1-14，2015.